

令和8年度 病害虫発生情報 第4号

令和8年10月21日

千葉県農林総合研究センター長

ネギ葉枯病の発生状況について

1 ネギ葉枯病について

糸状菌（カビ）による病害であり、葉に黄色や褐色の病斑や、すす状のカビを生じる。本病の一次伝染源は被害残さである。葉枯病菌は土中で1～数年程度生存する。そのため、過去に本病が発生したほ場では注意が必要である。

病徴は、先枯れ病斑、斑点病斑、黄色斑紋病斑に区別される。

先枯れ病斑は、生育中期以降の外葉に発生し、先端7～8cm程度が褐変して枯死する。

斑点病斑は、葉身中央部にはじめ白色の小斑点が発生し、のちに楕円形の褐色病斑（写真1）を生ずる。本病斑は黒斑病の病斑と酷似しているため、正確な診断には検鏡により分生子の形状（写真2）を確認する必要がある。

黄色斑紋病斑は、収穫期近くの中心葉に、薄黄色～黄緑色の数ミリ程度の境界が不鮮明な斑紋が現れ、病斑部分はわずかにくぼむ。分生子の発生は少ない。

発生条件として、平均気温15～20℃前後の涼しく、長雨や曇雨天・多雨が続く時期に多発しやすい。

肥培管理において窒素肥料の過多で発生しやすくなる。また、低pHで発生しやすい。

伝染経路は、残存した被害残さで越冬した病原菌が、翌春に胞子を風雨で飛散して伝染を繰り返す。

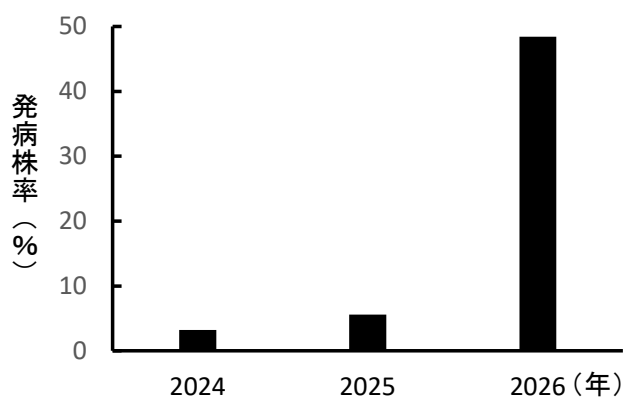


写真1 斑点病斑 写真2 分生子 図 ネギ葉枯病の発病株率の年次経過（10月上旬調査）

2 発生状況

（1）10月上旬に行った秋冬ネギの県内10地点の巡回調査において、葉枯病の平均発病株率は48.4%であった（図）。

（2）気象庁による1か月予報（10月15日発表）では、気温は高く、降水量は多い見込みであり、葉枯病菌の感染好適環境が続く可能性がある。

3 防除対策

(1) 耕種的・物理的防除

- ア 症状が出た古い葉や枯れ葉、被害残さはこまめに取り除き、速やかにほ場外へ持ち出し処分する。
- イ 風通しを良くし明渠を掘り排水に努めるなど降雨後、過湿状態にならないようにする。
- ウ 多肥や肥切れを避けて、適切な肥培管理に努め、健全な生育を維持する。
- エ 土壌pHを下げないように管理する。

(2) 薬剤防除

- ア 発病適温でかつ降雨が予想されたら、発病前に予防剤を計画的に散布する。
- イ すず状のカビが出る前の発生初期に速やかに治療剤を7～10日おきに散布する。
- ウ 防除効果を高めるため、展着剤を加用する。
- エ 調査では黒斑病と葉枯病が混発しているほ場も見られたことから、下記(表)を参考に防除薬剤の選定をおこなう。
- オ F R A Cコードが異なる薬剤をローテーションで選択する。

表 ネギの葉枯病に対する主な登録農薬(2026年10月7日現在)

F R A C コード※	薬剤名	葉枯病	黒斑病	希釈倍数	使用時期	本剤の 使用回数
3+M3	テーク水和剤	○	○	600倍	収穫14日前まで	3回以内
7	アフエットフロアブル	○	○	2,000倍	収穫前日まで	2回以内
7	パレード20フロアブル	○	○	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内
11	ファンタジスタ顆粒水和剤	○	○	3,000倍	収穫前日まで	3回以内
11	メジャーフロアブル	○	○	2,000倍	収穫前日まで	3回以内
11	アミスター20フロアブル	○	○	2,000倍	収穫3日前まで	4回以内
M5	ダコニール1000	○	○	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内
M7	ベルコート水和剤	○	○	2,000倍	収穫30日前まで	3回以内

※ F R A Cコードとは、殺菌剤の作用機構の分類を表すものである。

注 農薬の使用に当たっては、最新の農薬登録内容を確認し、製品ラベルに記載された使用基準等を守り適正に使用する。

- ・ 病害虫発生予察情報はインターネットでもご覧いただけます。
<https://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/nourin/boujo/>
- ・ 薬剤の選定については、最新の農薬登録情報を確認してください。
<https://pesticide.maff.go.jp/>

問合せ先

千葉県農林総合研究センター病害虫防除課

〒266-0014 千葉市緑区大金沢町180番地1

TEL 043(291)6077 FAX 043(226)9107

E-mail cafrc-bojo@mz.pref.chiba.lg.jp

